



シャクナゲ

とうとう、ハレルヤ（神をほめたたえよ）に始まり、ハレルヤで終わる、詩篇の締めくくりに入りました。詩編が歌われる目的そのものの集約といえるのでしょうか。詠み人知らずですが、これらの詩人たちは神殿に仕えるレビ人であり、詠唱者ではないかと思います。

146 篇はまず、ハレルヤ。わたしの魂よ、主を賛美せよ。命のある限り、わたしは主を賛美し／長らえる限り／わたしの神にほめ歌をうたおう。(1, 2) と、賛美は魂の叫びであると、最初に告白します。魂は、詩人の命と結び合っています。詩人が生きていくには、詩人自身の魂に、主の呼びかけがあって、相互に呼応することが必須であり、絶対である、と告白しています。

続いて、詩人は君侯に依り頼んではならない。人間には救う力はない。(3) と歌います。この世では君侯こそ、権力や富を持つ支配者ですが、所詮、人間であり、塵より生まれ、塵に帰る、儚い存在です。霊が人間を去れば／人間は自分の属する土に帰り／その日、彼の思いも滅びる。(4) と述べます。君侯自身も、救われなければならないただの人間であると述べています。ただの人間である者が、主なる神に呼びかけられ、生きる力を与えられることを喜び、感謝して歌います。いかに幸いなことか／ヤコブの神を助けと頼み／主なるその神を待ち望む人(5)

続いて、主の力、主の働きを賛美します。第一に、天地を造り／海とそこにあるすべてのものを造られた神を。(6a) と、天地の創造主、また、万物の創造主としての神を賛美します。闇と混沌から、光と命を生み出した、絶対的な存在です。第二に、とこしえにまことを守られる主は(6b) と、被造物に対して、まこと(真実)を、とこしえに(いつも、また、いつまでも)守られると、誠実な守護者であることを賛美します。第三に、主の守護はいかなるものかを述べます。虐げられている人のために裁きをし／飢えている人にパンをお与えになる。主は捕われ人を解き放ち／主は見えない人の目を開き／主はうずくまっている人を起こされる。主は従う人を愛し／主は寄留の民を守り／みなしごとやもめを励まされる。(7-9a) これら一連の神の働きは、弱者、貧者、困窮者への憐れみ、助け、保護などです。それと同時に、しかし主は、逆らう者の道をくつがえされる。(9b) との、神の御旨に逆らう者への裁きもされると述べます。

最後に、主はとこしえに王。シオンよ、あなたの神は代々に王。ハレルヤ。(10) と、主なる神は永遠の支配者、王としてとらえ、自らを従うべき者として、とらえます。しかも、シオンよ、あなたの神はと、述べている点において、シオン(エルサレム)という地名を用い、あなたの神として、イスラエルの民への教訓とも言うべき民族性も感じられます。しかし、詩人は、海とそこにあるすべてのものを作られた神(6) という、広大な視野で、神を、世界の、万民、万物の主、として賛美しているのです。

『讚美歌 21』は169「ハレルヤ。主をほめたたえ」 <https://sanbika.blog.ss-blog.jp/2010-08-17> と、170「わが魂よ、主をたたえよ」 <https://sanbika.blog.ss-blog.jp/2013-01-18> を挙げています。ともに、17 世紀のドイツの讚美歌です。ジュネーブ詩編歌は澄み切ったリコーダーの重奏です。

<https://www.youtube.com/watch?v=emUrd-KtOOY&list=PL15DF46D76CA72F5E&index=146>